

明治22年10月

天理大学人文学部講師

深谷 耕治 Koji Fukaya

明治17年の初参拝以来、増野家にとっておぢばへの伏せ込みが大きなテーマとなっていたが、家族一同の心がなかなか定まらず、明治22年8月23日の「おさしづ」では「妻いと儀、大和へ引越すに未だ早いと申します、これは理の論しが足りませんか、私の心が定まりませんか付伺」と正兵衛は赤裸々に胸の内を親神に問うている。「よう話傳え」とのお言葉通りに、その後も家族で相談を重ねる中、翌月の9月中旬には夫婦揃って咳の悩みとなり、いよいよおぢば伏せ込みへの心を定めていく。今回はその翌月、明治22年10月の「おさしづ」を見ていきたい。

- ・明治22年10月18日：増野正兵衛鼻先一寸痛み、又夢にかみそり身に打付ける事四度、誰とも分からず、追い掛け身体抱きかゝえ、背より切られると夢醒めしに付伺
- ・10月21日：春野ゆう六十八才喘息障り伺
- ・同日：清水与之助身上願
- ・同日：清水与之助より建家を願(老人鶴吉籍を引取りますか、又は国元にて別宅をさしても宜しいかの願)
- ・同日：清水与之助播州地方へ派出の願
- ・10月26日：増野正兵衛三島村足達保次郎田地三畝九歩買入に付、御礼を申上げおさしづ
- ・同日：増野正兵衛居宅新築御許し願
- ・同日：河内国松村栄治郎老母出直に付、中山会長齋主御許しの願／同会長の御供を増野正兵衛願

明治21年に教会本部がおぢばに移されて以降、「おさしづ」を通して別席制度も少しずつ形が整えられてきたが、明治22年10月17日に「本席の事情だんへつかえ、別席の処も日々増加するを以て、遠く所三三三の理を以て九箇月通よう改むる御許し」を願って、現行同様の9度の別席となった。おぢば伏せ込みを促されている正兵衛にとって、別席制度の進捗は関わりが深いといえる。

翌日の18日、正兵衛は「鼻先一寸痛み」、また、「夢にかみそり身に打付ける事四度、誰とも分からず、追い掛け身体抱きかゝえ、背より切られると夢醒めしに付伺」と伺っている。「さあへ心得ん。悟りどういふものであろう。生であらうか、現であらうか。いかなる悟り。案じる事は要らんが、一寸の理を論し置く。一日二日入り来る寄り来る処、一つ案じ心は要らん。めんへ心得ん一つの事情。」と、近日中に来る人に関して「案じる心」は要らないと端的に述べられ、鼻の身上や、たとえ風変わりな夢であったとしても一喜一憂しない「悟り方」を伝えられている。

3日後、妻いとの母である春野ゆう(68歳)の「喘息障り」について伺っている。「いかなるいんねん事情聞き分けるなら、身も鮮やかという。」と身上の障りを通した「いんねん」の自覚について述べられ、その上で「速やか事情、速やか事情定め」と論されている。おそらく、遅れている増野家のおぢば伏せ込みについてであろう。「一寸の理があれば、安心々々の事情分からいで切なみ。」と、なかなか安心できないことから、身上にも「切なみ」(辛さ)が訪れることを説かれ、「難儀さそう、不自由さそう神はあろうまい。」と親の目線を伝えられ、「不自由難儀は人間にとていんねん、身上速やかなれば心も勇む。」と「不自由難儀」は神に由来するものではなく、人間のいんねんにあることを論されている。そして、「世上いんねんの事情から見て、身上速やかになって、今一時道を定め。

一時どう、急いで心を定めてくれるよう。」と、世情のあり方から自身のいんねんを悟り、急いで道を通る心を定めるようにと説かれている。

同日、清水与之助も身上の障りで伺うと、「元々一つ何年経つへ。十分心を治め。心治めるなら、身は直ぐ何にも十分治まる。」と「元」から思案して心を治めることを伝えられている。また、同日に、甥の鶴吉に別宅を建てることについて伺ったり、播州地方への派出の件について伺ったりしている。

さて、正兵衛は、明治22年7月7日に「本席の向い東南に当る三島の足達地所買取っても宜しきや」と伺いを立て、3カ月経って購入が完了したのであろう、10月26日に、「三島村足達保次郎田地三畝九歩買入に付、御礼を申上げおさしづ」を頂いている。「尋ねる処十分、前々心と十分受け取る。」と、おぢば伏せ込みに際して、本部に土地を献納しようとする心を受け取られ、「又々だんへ年限の道を見れば、元という。」と、今日までのように年限かけて成ってきた元々の思いについてふれられている。

同日、その土地への新築のお許しを伺うと、「吉い句々同じ心を以て鮮やか。」と、句にあたっての変わらない心定めを受け取られ、「心胆の心十分、同じ事情を寄せるなら、心置き無う事情という。」、おぢば伏せ込み心に心を寄せるなら、心置きなく事情を進めようと述べられている。

また、その日は、松村栄治郎の母が出直したようで、初代真柱のお供で河内まで出張することについて伺っている。「さあへ心掛かるだけ運んでやるがよい。」と許されたあと、「一寸一言言うて置く。一日の日、事情済んだら直ぐに戻るやで。そのまゝ外へ行つてはいかんで。運んだら直ぐと戻るのやで。」と一言注意されている。おぢばで勤める者の心構えを論されているとも解すことができよう。

鼻

さて、『身上さとし』では「鼻」の項目で、明治22年10月18日の「おさしづ」を引いて、「ここ一兩日に、来る人について案じ心はいらないという意味で、鼻先の痛みは、先案じしてはならぬと指示されたのであろう」と説明している。

増野正兵衛の文脈でいえば、近日中に実際誰が来たのかはわからないが、3日後に義母の春野ゆうの身上について伺っていることから「珍しい人がやって来る」というより、「近々やって来る人の身上について心配いらない」ということかもしれない。また、割書を見ると、この「おさしづ」のお言葉は、「鼻先一寸痛み」とともに、正兵衛の見た夢に関しても応答しているものと解することができる。夢の描写は具体的で、正兵衛の心労の現れと思えるような内容だが、「おさしづ」はその内容に関して特別に取り上げることではなく、「生であらうか、現であらうか。いかなる悟り。」と悟り方について論されている。夢や先々起こることに関して、その内容がどんなものであったとしても、その出来事を通して親神の思召を悟る際には、決して「案じ心」は要らないということも伝えられているのであろう。しかも、そのことを、「おさしづ」では短い言葉で端的に伝えられていることも印象的である。

[註]

(1) 深谷忠政『教理研究身上さとし—おさしづを中心として』天理教道友社、1962年、86頁。